

フィールド風

(現場)からの

宮田守男

2月下旬、穏やかな日差しが注ぐ松本短期大学教室で開催された公開講座「日常の生活をほんの少し潤わせるアートのはなし」を受講する。幼児教育・介

護福祉・看護学科など専門知識を学生に享受させるため思うように学生を地域で行動させる事ができないと大学が地域交流センターを設立、その一環として開催した公開講座だ。今回は、幼児保育学科が担当、講師は保高一仁先生だ。多摩美術大学院を修了し、アートは、人と人を穏やかに結びつける力があると幼児教育に取り組む。「地域の高齢者を対象にした絵画教室」、「幼児と親のコミュニケーションをテーマにした絵画教室」、「発達援助のデイケアセンター、高齢者福祉施設、美術館等で地域に根差した

ワークショップ」など多数の地域活動を実践しアートの力は、医療や福祉現場にも効果を及ぼすと熱心に認知症の予防にも取り組む。アートとは、芸術、美術、間接的に社会に影響されると捉えられ

アートという視点で地域連携に取り組む学問を知る

ていて、人それぞれにアートの捉え方は千差万別だ。日常の風景をアートと捉えられたらとどんなに良いのだろうと思う事がある。幼

心だ。だからこそ「ふるさと」の言葉には愛着があるのだろう。この心が幼児の世界感として育っていれば、日本の景観に取り組み意義も全く異なっていただろう。そしてアートが持つ「人と人を穏や

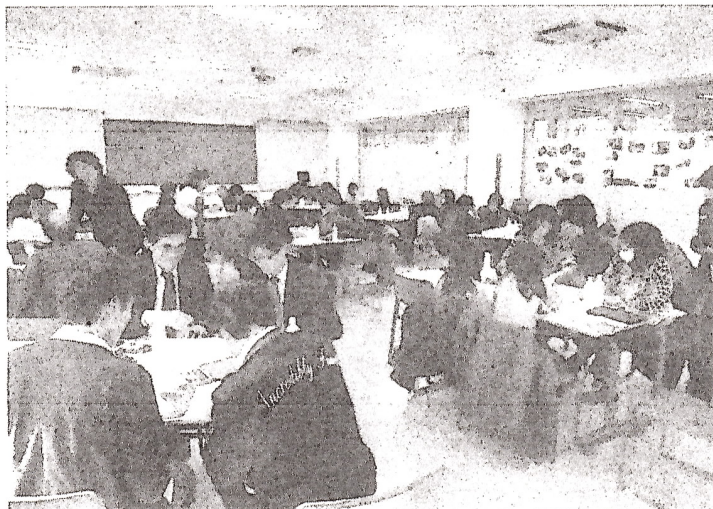
かに結びつける力」があるのだとしたら、学生時代に会得した芸術性は、福祉への対応も増していたのだろう。「一枚の白紙に自由に絵を」と大人に指示しても躊躇するが、子供達は楽しそうに書き始

めるとの話で実践した体験がアートの魅力を再認識する。

松本短期大学が配布した資料の中に、白馬でも講演された比田井和孝さんの「与える者は与えられる」の法則と同じ仕事をしていても、お金を「もらう」

だけのために働いている人は、それ以上のものは与えられないが、「役に立ちたい」との思いで働いている人は、周りから感謝され、信頼されお金で買えない価値のあるものが多く与えられている。との紹介がある。多くを学び、夢を抱き、社会で貢献したいと学ぶ若者が学舎から、多くの

うれしい、悲しい、寂しい。感情を言葉にする事は難しいが、アートの美術技法を使えば表現できる



現場で大きな飛躍を成し遂げてほしいと思っ た講義でもあった。
(NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上)